

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A中学校)

夏季休業日後の2日間、特別時程として生徒全員が希望する教員と面談できるようにした。面談がスムーズに進むように、事前に面談の方法やポイント・心構えを全教員で共有した。特に、様子の気になる生徒には、丁寧に対応できるように具体的にアドバイスをした。面談後には、生徒の状況に応じて、継続して面談を実施したり、SCやSSW、外部機関と連携したりして、生徒が学校で安心して過ごせる土台づくりを行った。また、学習面では、定期考査前を中心に学習教室を開き、自習スペースを提供した。教員に質問等をしやすい環境を作り、学習に対する不安感の軽減につながっている。

【取組2】(全巡回担当校)

区内の中学校2年生を対象とした陸上競技大会を毎年9月に開催している。各学校で、自分の学校の生徒を応援したり、同じ小学校だった、他の中学校の仲間の応援をしたりするなど、人間関係を育む取組となっている。同じ学校の生徒同士の交流だけではなく、同じ小学校に在籍していた別の中学校の生徒との再会を喜ぶ姿が見られ、学校を越えた幅広い人間関係の構築につながっている。



【取組3】(B中学校)

不登校生徒への個別の学習支援では、生徒がやりたいことを選択することを大切に指導している。何かを組み立てるなどの作業が好きな生徒は、スピーカー作成等を技術科の教員と協力して実施している。検定試験に関心がある生徒には、検定試験に向けた学習を支援するなど、生徒の状況に応じて可能な活動に取り組んでいる。

【取組4】(巡回担当校)

不登校の支援について研修を実施した。内容は、不登校生徒の欠席しはじめから再登校になるまでの状態や、初期対応に関する具体的な指導法、保護者連絡の仕方等であり、事例研究やワーク等の体験型の研修とした。



多様な学びの場を確保する取組

（「早期支援」及び「長期化への対応」の取組）の推進

支援会議（C中学校）

学年会において、支援が必要な生徒に関して、社会性、学習面、生活面における3観点からの強みを確認し、支援の方向性を協議。隔週開催される支援会議では、各生徒の情報共有と共に、SC、SSW、不登校対応巡回教員も参画し、具体的な手だてを多方向から検討した。この結果各教員の支援への意識が高まっている。

アウトリーチによる支援（全巡回担当校）

不登校生徒の保護者を対象とした保護者の会にファシリテーターとして参加している。悩みを相談し、情報共有を通じて保護者に安心感を提供できる場となっている。不登校対応巡回教員が、進路情報に関する相談を受けたり、支援や相談を受けられる機関を紹介したりするなど、支援の場となっている。

校内別室における支援（D中学校）

校内別室の目標の1つに「学校復帰」を位置付け、当該学年の授業や学校行事に参加できるような取組を実施している。生徒が行事に参加できるように、登校支援委員会を軸に支援の方向性を確認した。SCによる日々のサポートを行うとともに、不登校対応巡回教員が当該生徒から不安を聞き取るなどしたりして、無理のない範囲で参加できるように支援した。また、保護者の不安感はSCやSSWが聞き取り、それらを学校内支援の情報を相互に共有して、保護者も安心できるよう、連携を強化している。不登校支援員も普段の関わりから、些細な気づきも共有してもらえるようにし、生徒と担任の橋渡しとして機能する体制となっている。

デジタル機器を活用した支援（E中学校）

学習に対する不安で教室に入りにくい生徒に対し、デジタル教科書を活用して学習を進め、普段の授業でも使えるよう練習もしている。また、授業支援ツールを活用し、クラスで出題された課題も進められるようにしている。学習の進捗や提出物は支援員が日課表で管理し、教科担当と連携して進めている。

関係機関との連携（A中学校）

不登校の状態が続いている生徒について、家庭訪問のみではなく「自宅では学習ができない」という希望から、青少年プラザに協力を依頼し、場所を借りて学習指導を実施している。学習をするという目標があること、家庭訪問のみの場合より、教員と関わる時間が増えるため、社会性の向上にもつながっている。

成 果

不登校生徒と学校をつなぐ役割として重要な位置を占めるようになってきている。教員の立場で助言したり、専門的な立場で対応したりすることで、スムーズに支援につながっている。

課 題

再登校につながるケースは増えているが、欠席が長期化する不登校生徒への支援方法を模索する必要がある。